



四万十町
町内「ぶら〜り」散策

奥神ノ川

おくごうのかわ

西分と東分にわかれており、すでに

は「奥神川之村」と明記され、さらに

落であるが、文献によれば、戦国期に

ひっそりとした、小さな谷間の集

る。現在3世帯、5人が暮らしている。

置する地区だけに、平地が少ない谷

間の集落である。山の斜面を切り開

いて作った小さな農地が点在してい

由来である。

奥神ノ川地区は、神ノ川上流に位

置する地区だけに、平地が少ない谷

間の集落である。山の斜面を切り開

いて作った小さな農地が点在してい

る。現在3世帯、5人が暮らしている。

置する地区だけに、平地が少ない谷

間の集落である。山の斜面を切り開

いて作った小さな農地が点在してい

の山は全国にいくつもある。

枝折山は神ノ川の起点でもある。

神ノ川が流れる谷間の東側に連なる

山々の、ちょうど裏手が五社さんを

祀るエリアである。神ノ川の「神」は

五社さんを指す。神ノ川の川の名の

由来である。

奥神ノ川地区は、神ノ川上流に位

置する地区だけに、平地が少ない谷

間の集落である。山の斜面を切り開

いて作った小さな農地が点在してい

が奥神ノ川地区である。さらに北には

枝折山(標高806m)を望む。

枝折山と書いて「しおりやま」と読

む。調べてみると、古来ここに限らず

多くの地域で、山道で迷わないように

枝を折ってそれを目印とすることが

あったらしく、それを「枝折」といつた

のだそうだ。この枝折山の名の由来も、

おそらくそういうことであると思わ

れる。調べてみると、枝折山という名

の山は全国にいくつもある。

枝折山は神ノ川の起点でもある。

神ノ川が流れる谷間の東側に連なる

山々の、ちょうど裏手が五社さんを

祀るエリアである。神ノ川の「神」は

五社さんを指す。神ノ川の川の名の

由来である。

奥神ノ川地区は、神ノ川上流に位

置する地区だけに、平地が少ない谷

間の集落である。山の斜面を切り開

いて作った小さな農地が点在してい



可愛らしい沈下橋

しつかり感じて

いるに違いない。



美しい神ノ川

とがたくさんあ

るかもしれない

が、ここでしか

得られない豊か

さを、ここに暮

らす人たちは

確かには不便なこ

とがたくさんあ

るかもしれない

が、ここでしか

得られない豊か

さを、ここに暮

らす人たちは

しつかり感じて

いるに違いない。

さて、奥神ノ川に入ると神ノ川の

水の美しさに目を見張る。川にかか

る沈下橋も可愛らしく、美しい水質

にマッチしている。そして、ここで暮

らす人たちの暮らしぶりに、どこか

達観した意志を感じる。それは決し

て「不便なところに暮らす悲壮感」で

はなく、むしろその反対で、人間が本

来有しているであろう、ある種のお

おらかさのようなものである。懐の

大きさと言って良いかもしれない。

が困難であったと思われる。すべて

本田(二十四石余)で、山内常之介の

支配地となっていた。寛保年間の記

録には、4世帯・13人が暮らしてい

るとある。

さて、奥神ノ川に入ると神ノ川の

水の美しさに目を見張る。川にかか

る沈下橋も可愛らしく、美しい水質

にマッチしている。そして、ここで暮

らす人たちの暮らしぶりに、どこか

達観した意志を感じる。それは決し

て「不便なところに暮らす悲壮感」で

はなく、むしろその反対で、人間が本

来有しているであろう、ある種のお

おらかさのようなものである。懐の

大きさと言っ

地区の北端近くの分かれ道。

左は林道

村として成立していた

ようである。元禄時代

の記録では、この地で

新しく開拓された水田

等は見当たらない。や

はり、平地の少ない山

間ということ、開拓

町のうごき	(11月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	四万十川の 水質状況	適正值(mg/l)	12月1日	
	男	8,584	-13	男	2	10	7		リン酸	≤ 5.0	測定範囲以下
	女	9,568	-23	女	1	12	14		硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下
	計	18,152	-36	計	3	22	21		アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
		世帯数	8,641	-12				アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05	
								化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下	

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部